延世大学の図書館について

産業理工学部経営ビジネス学科　准教授　　河　　知　延

1．はじめに

私が韓国の延世大学（Yonsei University）商経学部に入学したのは1990年3月のことである。その頃はまだ朴正熙前大統領から続いた軍事政権に強い反発を抱いた学生らによる学生運動が盛んな時期でもあった。ソウルの中心に位置し正門が広々と開けていた延世大学のキャンパスには度々全国から学生らが集まり、学生運動の集会が開かれ、戦闘警察（治安維持業務の補助のために民間人の兵役者から選抜、任用された警察）との衝突が繰り広げられていた。大多数の一般の学生は催涙弾の強烈な刺激臭をハンカチで防ぎ、衝突の様子を横目で見ながらいそいそと大学校舎に入っていくのが日常的だったが、私が3年次になった1993年に民主化運動を主導していた金泳三氏が第14代大統領に就任したことで文民政府が樹立し、パッタリと学生運動も無くなってしまった。それまで学生運動の集会の場として闘争の文字が飛び交い荒々しかった「中央図書館」の周りは、従来のあるべき平穏な姿に早変わり、自学スペースを確保しようと閲覧の場所取りをするための学生の列で埋め尽くされるようになった。

韓国の大多数の大学生は、学生生活の最も多くの時間を図書館で費やす。筆者も在学していた頃は朝一番に閲覧室の机を確保し、講義の合間や講義終了後には当時の閉館時間であった23時まで図書館で過ごしていた。勉強ばかりしていたかのように聞こえるかもしれないが、実はそうとは言い切れない。大学図書館は学科やサークル、他学部の友人や先輩・後輩と会うための社交の場でもあり、情報交換の場でもあった。図書館内に設置された簡易食堂や休憩室、新聞閲覧のためのオープン・スペースだけでなく廊下や階段にも談笑を交わす学生で溢れ、正に情報プラットフォームとしての役割を果たしていたと言える。しかし、図書の閲覧という本来の機能は十分ではなく司書の役割も書籍の保管・管理に限られていた。

研究出張がてら2014年8月に延世大学の中央図書館を訪ねた。卒業してからちょうど20年ぶりである。本稿は、韓国の大学図書館がどのような変貌を遂げどこに向かっているのかについて、延世大学の中央図書館の取材内容や個人的な経験をもとに紹介するものである。

2．延世大学と中央図書館

延世大学は、1885年に宣教師であったH. N. アレンによって設立されたセブランス医科大学と、1915年に同じく宣教師であるH. G. アンダウッドによって設立された延禧大学を母体としている、130年の歴史を持つ私立総合大学である。本校の中央図書館は1915年の延禧大学創設と同時に開設されたが、設立者および初代校長であるアンダウッドが寄贈した230冊の図書によるスタートであったという。1924年には蔵書数も5,700冊に増え、現在大学本部建物として使用されている石造4階建ての本館（文化財史跡、写真1）に独立した図書館の空間を設けることとなった。蔦に覆われた延世大学を象徴する建物であり、正面にはアンダウッドの銅像がキャンパスを見下ろしている。その後、1979年に花崗石による石造5階建ての建物（地下1階、屋上部屋）が竣工され、現在の学術情報院として位置づけ

られるようになった（写真２）。

写真１　1979年まで図書館として使用されていた延世大学本館

写真２　延世大学中央図書館

延世大学は韓国内大学の中で最も学術情報の整備に力を入れてきた大学の一つであると言える。1957年に大学で図書館学科が最初に設置されたのも延世大学であったが、1990年には韓国内では最初に図書館電算化トータルシステムを稼働させ、2001年には統合型デジタル図書館システムを開発、2005年にはデジタル・コンテンツ連携機能を強化した電子図書館システムを導入し、2007年には韓国内初の当該学問の専門家による情報サービスの提供を開始しており、電算化の流れに先駆けたインフラの整備や提供サービスの高度化に力を注いできた。2008年には既存の中央図書館と連結された延世 - 三星学術情報館（写真３）を新築したことで韓国内では最大規模の図書館となった。2013年現在、図書206万冊、刊行物８万冊、電子資料15万冊、非図書資料８万本を所蔵しており、韓国内では上位の蔵書レベルを保ってきた。

写真３　三星 - 延世学術情報館

とはいえ、1990年代当時の図書館は今とは違い部分開架制であったために、殆どの学生は図書の閲覧のためでなく自主勉強のために図書館を利用していた。図書を閲覧するにはその検索や閲覧申請が煩わしく、レポートや卒業研究といった特別な理由がない限り、閲覧はあまり利用していなかった。それでも３階から６階までの全閲覧スペースは、図書館開館時間である６時から閉館時間である23時まで常に学生でいっぱいであり、専門科目や資格、国家試験の勉強に勤しみながら、地下１階と屋上にある簡易食堂と喫茶コーナーで食事や休憩を取ることが常であった。

20年ぶりに訪れた母校の中央図書館は、外観こそ変わらないものの内部はまるで違う建物になっていた。ヨーロッパでは伝統を重んじ数十年経っても変わらないのが特徴であるとすれば、韓国は最新を求め常に変化することが特徴であると言えるだろう。最初に目についた点はIT化がかなり進んだことであった。かつては警備員が壇上で一人ずつ学生証を目で確認していたが、現在ではチップが組み込まれた学生証で情報管理が一本化され、図書館の入退室や貸し出し、閲覧室やセミナールームの予約をすることもできるようになっていた。自主勉強の場所を確保しようと荷物を置きっぱなしにしたり、空いたスペースを探すために１階から６階まで隈なく探し回ったりすることも今の学生はしなくて済むのだろ

う。パソコンやLANが使える環境もかなり充実していた。学部の建物ごとに設置されている電算室とは別に、図書館においても大幅にIT環境の整備をしていた。中央図書館と1階が豪華なラウンジ（写真4）で繋がれ隣接している6階建ての延世-三星学術情報館（以下、学術情報館）には2階のインフォメーション・コモンズ（338席、写真5）、および、3階のマルチメディア・センター（212席）にパソコンが配置されており、学術情報検索や課題の取り組み、ネットサーフィングなど自由に使えるだけでなく、マルチメディアの資料の閲覧、編集、メディア製作や鑑賞までできるようになっている。いくつかの閲覧室においてもパソコンを持ち込むことが許可されており、学生はフリーのWiFiを使い学習している様子が見られた。

また、小グループによる学習を促す設備が充実していた点も印象的であった。いずれも擦りガラスの壁に仕切られ、5～10人前後の人数を収容し、液晶パネルとAV機器が設置されたブースであったが、中央図書館にはセミナー・ルーム（17部屋）が、学術情報館には協業コーナー（16ブース）、プレゼンテーション・ルーム（4部屋）、セミナー・ルーム（7部屋）が設置されていた。夏休みであったにも関わらず使用者は多く、ブースの中を覗くと、英語の教材で一緒に勉強をしているグループや資格講座のようなDVDで勉強をしているグループ、課題の議論を行うグループなどで賑わっていた。いずれの部屋もパソコンや携帯、図書館に設置された端末等で簡単に予約ができる。グループ学習を促す設備と利用しやすい制度が整っている点や、書籍資料だけでなくマルチメディア資料も充実しており、それらの活用や創出を促す図書館のあり方は望ましいと感じた。

閲覧場所が自学スペースとして利用されていることは昔と変わらないどころか、場所も拡張し利便性も向上されていた。両方の建物共に資料室内に閲覧箇所が設置されているだけでなく、自学スペースとして利用されている大部屋の閲覧室（個別の仕切りが付いた机を配置）（写真6）も席数や部屋数が拡張されていた。中央図書館には一般閲覧室（992席）や大学院閲覧室（386席）の他に、24時間利用できる24時間閲覧室（75席）が、学術情報館にも一般閲覧室（766席）や法学図書館（282席）が設けられている。それらの閲覧室もまた、パソコンや携帯で空席の状況が確

写真4　連結ラウンジ

写真5　三星-延世学術情報館のインフォメーション・コモンズ

写真6　中央図書館の一般閲覧室

認でき予約ができる。卒業生や一般にも開示（手続きが必要）され1年中利用できるなど利便性が向上されていると感じた。実は、図書館が自主勉強の場として活用されている点については韓国内でも議論が止まない。特に近年においては読書室ではない図書館本来の力量を強化する必要性が強調され、図書館の整備が本格的に進められている。以下では現在進行中である韓国の図書館改革とその方向性について紹介する。

３．韓国における図書館の課題と方向性

韓国の大学図書館の改革は、1980年代末に展開された釜山大学の学生による図書館改革運動がその発端であるという。自主勉強の場になっていた図書館を本来の「学問の広場」に変えることを目標に掲げ、大学側を相手に2年間の啓蒙運動を展開していたことが記録として残っている。彼らは大学図書館の本質的機能について持続的に問題を提起したことで、その後の司書業務の開発やシステム化、主題化に影響を及ぼしたとされている。司書が閲覧室や倉庫の管理者ではなく、学問と教育活動を多様な資料でサポートする資料専門家であり利用教育を担当する教育者であることを要求したのである。このような動きが影響を及ぼし、韓国の大学図書館は1990年代の半ばには主題化、および、完全開架制へと急速に改革していったが、ちょうど私が大学を卒業した後からであった。20年ぶりに見た母校の大学図書館の内部が全く違う建物であるかのような印象を受けたのも、今考えると納得がいく。

韓国は1963年に初めて「図書館法」が制定されて以来、時代の要望に沿って複数回の改訂が行われたが、大きな転換点となったのは2007年に施行された全面改訂であったとされる。図書館の機能として、国の知識インフラの核心的な基盤になること、および、国民の自発的な文化体験・学習空間となることで知識情報活用能力を高め情報格差を解消させる場になることなどが改訂の目標とされた。この改訂によって大統領直轄の図書館情報政策委員会が発足され、5年ごとに図書館発展総合計画を樹立し施行すること、地域を代表する図書館を設立し情報格差を解消することなどが盛り込まれた。これに伴い、2009年から2013年までに第1次大学図書館発展総合計画が実施されたが、この5年間、大学図書館は図書所蔵数や資料購入費などの量的な成長を遂げ、学術情報資源の流通体系を構築したことで共同活用が可能になり、さらに、人的資源の力量が強化されたと評価されている。

しかし、数値が改善されたとはいえ、国内外大学図書館の水準比較研究によると、米国や日本等の諸外国に比べて韓国図書館の蔵書数や司書数がかなり少ないという。韓国大学図書館統計分析（2014年）では、北米115大学における平均所蔵図書数は526万冊であるのに対し、韓国は最も蔵書数が多い大学（ソウル大学図書館）でも470万冊に過ぎないという（北米ではハーバード大学が最も蔵書数が多く、1,940万冊であった）。また、職員一人当たりサービス提供対象者数においても、北米115大学の平均が222名であったのに比べ、韓国の上位20位大学の平均では655名であることから、司書を含めた職員の数もかなり不足していることが指摘されている。

このような状況を受け、先進国と比べると韓国内の大学図書館の学術情報インフラは不足しており、大学間の学術情報の格差による教育、研究環境の不均衡は是正されていないとして、2014年から2018年を期間とする第2次大学図書館総合計画が発表された。5年間で800億ウォンが投入され、大学の競争力は図書館の競争力と直結していることを認識しながら長期的で持続的な図書館の支援を国のプロジェクトとして実施することになったのである。今後の韓国の大学図書館の方向性は、各図書館内で創造的な利用者を育成し学習を支援できるような設備やデータベース、特に電子資料や海外の学術データベース、および、司書の役割を構築すること、国立大学や首都圏の私立大学に偏重している情報の格差を解

消するために情報共有のプラットフォームを構築すること、および、それらを評価できるような指標を策定し持続的に分析、支援することが推進されるだろうと予想できる。また、大学のデータベースや図書館スペースを一般の人が活用できる体制も今後拡大される予定である。

４．おわりに

先進国の図書館と足並みをそろえようとする取り組みは韓国では始まったばかりである。情報の意味合いが書籍ベースから非書籍を含めて拡大している現在において、大学図書館の役割は、それらの情報を集積・管理し組織内で利用させるという一方向的で閉鎖的なものから、様々な情報へのアクセスや共有を促すだけでなく、組織の境界を越えた利用者からの新たな情報創出を促すという、より主体的で双方向的、かつ、オープンなものへと移り変わろうとしているように感じる。図書館を読書室のように利用している利用者の要望に応え、閲覧室を拡張し利便性を向上させることに重きを置いてきた韓国の大学図書館にとって、それらの利用者を学術情報の利活用や情報創出にいかに引き込むのか、その力量が試されることになるだろう。

中央図書館を見回ったあと、勉強の合間によく利用していた最上階の喫茶コーナーで休憩を取った。かつてはトッポギ（韓国伝統の辛い餅）やキムパプ（韓国風海苔巻）を食べていた場所が今ではお洒落なコーヒー専門店に姿が変わり、挽き立てコーヒーとケーキを楽しむ後輩達の姿が目に飛び込んできた。○○科目は難しいのか、△△教授の授業は面白いのかなど、いつの時代も変わらない彼らの話し声を背に帰路に就いた。